

農業の新しい技術

No. 671(平成26年5月)
分類コード 04-01
熊本県農林水産部

多収米の収量確保にはトビイロウンカの防除が 欠かせない

農業研究センター 生産環境研究所病害虫研究室
担当者：樋口聡志

研究のねらい

飼料用や米粉用に栽培される多収米は、主食用米品種に比べてトビイロウンカの密度が高くなる（農業研究成果情報 No. 593（平成 25 年 5 月））。しかし、多収米における本種の被害や防除法には不明な点が多い。そこで、移植時期別の発生や薬剤の効果を検討し、多収米の収量確保に必要な防除技術を確立する。

研究の成果

1. トビイロウンカの飛来が通常の 6 月下旬～7 月上旬の場合、登熟期間を確保するため 6 月中旬までに移植すると、本種の密度が高まり、坪枯れが起きる(図 1)。
2. フィプロニルまたはピメトロジンを含む育苗箱施薬剤は、トビイロウンカに対する防除効果が高い(図 2 左)。なお、移植時期が遅れた場合は、セジロウンカの被害を受けるが、本種に対する効果はピメトロジン粒剤が高い(図 2 右)。
3. 本田防除は、第 1 世代～第 3 世代のトビイロウンカに対する効果が高い若齢幼虫期に粒剤を処理する(図 3)。ただし、防除適期を外すと、効果はほとんどない(図 3 右の 2013 年 7 月 29 日処理)。

以上のことから、適期（6 月上旬～中旬）に移植した多収米は、トビイロウンカの被害を受けやすく、収量を確保するためには防除が必要である。防除は、適切な農薬の育苗箱施薬と本田での適期防除の効果が大きい。なお、本田での適期防除は、病害虫防除所から発表される本種の発生時期予測を考慮して行う。

普及上の留意点

1. 本田防除の粒剤処理は、湛水状態（3 cm 程度）で均一に散布し、4～5 日間は湛水状態を保ち、処理後 7 日間は落水やかけ流しをしない。
2. 本田防除を行う際には、病害虫防除所から発表されるウンカ類の飛来及び発生状況を参考にする。（<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto>）
3. 飼料用米の防除では、「飼料用米の生産・給与技術マニュアル」（http://www.naro.affrc.go.jp/nilgs/project/jiky_pro/029451.html）を参考にする。
4. WCS の防除に応用する場合、「稲発酵粗飼料生産・給与技術マニュアル」（http://www.maff.go.jp/j/chikusan/sinko/lin/1_siryo/ine_manual/index.html）を参考にする。

[具体的データ]

熊本県農林水産部

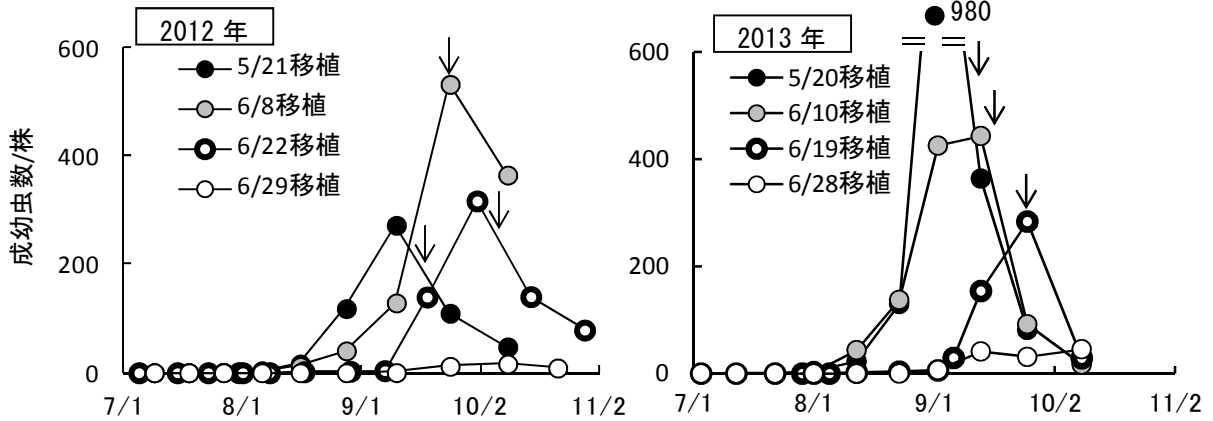


図1 異なる移植時期におけるトビイロウンカの発生推移

品種：北陸 193 号 薬剤防除なし 飛来日：2012年7月14日、2013年6月18、6月25日、7月5日 図中の↓は、坪枯れの発生時期を示す。

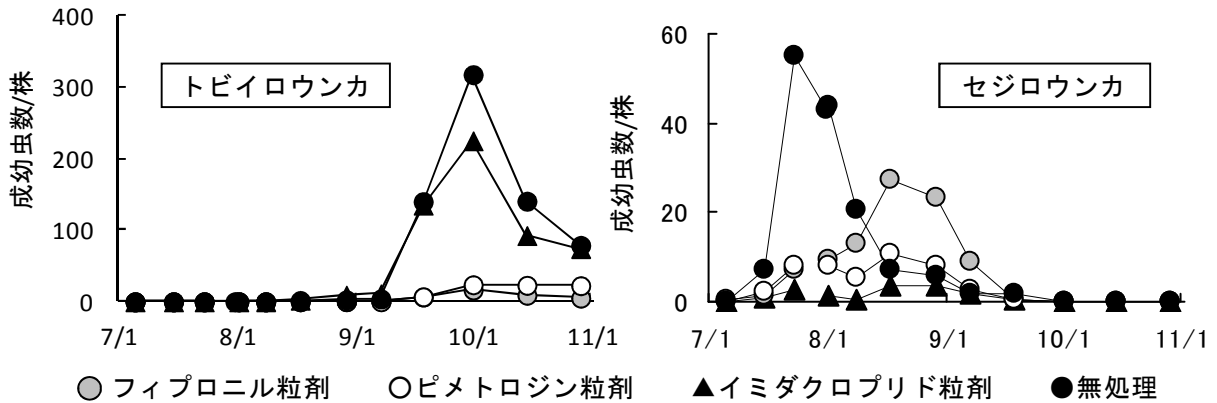


図2 トビイロウンカおよびセジロウンカに対する育苗箱施薬剤の密度抑制効果
品種：北陸 193 号 移植日：2012年6月22日 本田防除なし
育苗箱施薬剤は、移植当日に 50g/箱処理した。

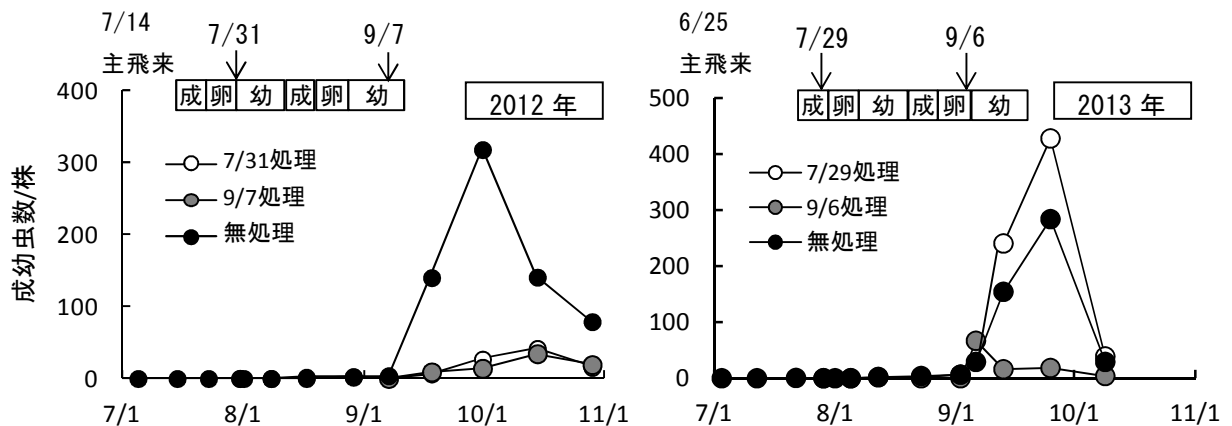


図3 トビイロウンカに対する本田防除剤の密度抑制効果

品種：北陸 193 号 箱施薬剤なし 本田防除剤としてジノテフラン粒剤を 3kg/10a 処理した。図中には、有効積算温度を基にトビイロウンカの发育ステージを示した。